

謹んで奏す工部大書記官從五位臣大鳥圭介

日本美術協會祝詞

有栖川熾仁親王

櫻花爛熳の好節に際し本會列品館の落成を告げ茲に開館の式を行ふ
余は深く欣喜する所なり思ふに本會が美術の國家に必要なを悟り
卒先して其振起に従事せしは實に明治十二年にして已に十餘年の前
に在り爾來會員諸子の力により年逐ふて隆盛に向へりと雖も未だ適
當の家屋を有せず是れ余が曾て遺憾とせし所なり今や帝都の名園に
於て一大館を新築し以て本會の基礎の確立するを得たり豈に歡喜せ
ざるを得んや然りと雖も益本會の事業を擴張し常設の展覽場を開か
んと欲せば未だ此館の建築を以て足れりとせず更に進みて堅牢の別
館を増設するは蓋し諸子の難する所に非ざるへし故に余は今日の式
を擧ぐるに當り他日又諸子と別館を開くの歡を共にせんとを希望す
因て此の意を告げて以て諸子に勗めしむ

祝博覽會開場文

成島 柳北

我が大政府開物成務以て富強の國基を鞏くせんを圖り今茲明治十
年令して内國勸業博覽會を忍岡の公園に開く全國の民競て其の貨物
を齎し自西自東來たつて此に會向す我か 天皇陛下乃ち百僚を率ひ
親臨して大に開業の式を行ふ實に第八月二十一日也小民柳北亦朝野
新聞社に長たるを以て幸に特恩を承け其の席末に列して盛儀を陪觀
するの榮を荷へり恭く蕪詞を綴り以て會場の光輝を發揚せんと欲す
れども非才薄識豈敢て能せんや況や府縣の官僚其の祝辭を呈して金
玉前に鏘々たり江湖の文士亦賀章を草して光燄後に煌々たるをや柳
北復た遼豕を獻して笑を大方に買ふを欲せざるなり然れども斯の會
場に臨み心竊に公私に就て感ずる所のもの有り敢て不恭を憚らず楮
墨を假て以て其志を言ふ
迥に往昔の天地を回顧すれば九重は遙遠にして彼の西土に在り四野

の群黎畢生天日を拜せんと欲するも豈得可けんや而して農事商法工業の如き國の富強に關する者と雖も亦擯斥して鄙野の事を爲し士君子皆之を談ずるを慙づ然るに戊辰維新の成業以來大に舊習を一洗し龍駕を東京に遷すのみならず東幸西巡親しく稼穡の艱難を訪問せられ貴賤懸隔の弊を矯め上下壅塞の害を除き草野の民亦た天威に咫尺するの幸福を享く加之農商工業は國の精神を培養するの要具たるを確認せられ勸農勸商勸業の諸局を設け竟に今回民庶を鼓舞誘掖して大に此の會場を開くに及へり自今而後我か邦人の争て一益を謀り一利を興じ以て富強の國基を鞏くするに至るや昭々として火を觀るか如し是れ柳北の公に就て竊かに感ずる所のもの也
今を距る三十餘年柳北の幼稚なるに當つて父母爲めに市井の喧囂を避け淺草の故宅を去つて忍岡の下に移住す柳北日に乳母に抱かれ來たつて此の地に遊ぶ漸く長して自ら行歩するより成童に迄ふ比まで

日として此に來らざる無く林木堂宇皆舊相談よ係る然れども當時忍岡の地は空しく梵王の版圖に歸して徒らに看花の客と饗物の人を見らのみ今や全土は一變して公園となり衆庶借樂の地たるのみならず斯くの如き一大有用の會場を設けて以て全國の鴻益を開き各府縣の士民を會合し至尊親臨して以て盛典を舉行せらる山靈木魅亦欣々相慶するや知る可き也而して草莽の一布衣柳北の如き者亦操觚者の末に在るを以て寓目に與るを得たり若し我か父母をして今日の聖世に生有せしめは其の歡呼喜躍する果して如何るや嗚呼黃壤起す可らず青年再す可らず是れ柳北の私に就て竊かに感ずる所のもの也抑も今日の鴻儀を仰瞻して斯くの如き感情を興し之を筆舌に發する者は豈に痴人の夢を説くに異ならんや大方の譏り固より辭す可らざる者有り然りと雖も柳北は朝廷簪纓の列に在る者に非らず本場土木の事に従ふ者に非ず唯だ天恩の辱さを謝し併せて俯仰古今の感を

閑言語に寫すのみ亦昇平の一民たるに負かざるを信ず柳北謹言

露西亞語學校卒業式祝辭

副島種臣

余は諸君の露西亞語學校を卒業するの光榮を祝す
曩に我東邦協會は露西亞國に密邇するを以て露西亞語の我國
人に必要なるを看破せり露西亞國は樺太即ちサカレン其殖民を舟も
て移せり而して女真即ちウラシホストツクに又殖民を車もて移さん
とす先きには露西亞地方は土滿に堪へすと思ひしも今より將來は輒
ち將に人滿を見んとするの輿概あり此時に當りて我國民の相往來頻
繁なると國際問題の相緊要急劇なると露西亞語の須用なる誰か其然
るを疑はん此に於て東邦協會は露西亞語學校を建立せり
夫れ人間の壽命は寧ろ百歳とするも國家の壽命は萬年にして而して
在り今百歳の壽命を以て國家萬年の長計を建る是れ識者の感はざる

所に於て而して東邦協會の資て以て眞據とする所より彼の魯のピ
トル帝の抱負と國是とを見るに亦此に在る者の如し東邦協會の規模
は雄偉宏遠なり英雄能く英雄を知る操と使君との談柄のみに非す目
前の小利を見て一朝事足れりとす余輩の取らざる所なり
且つ此に一言せんとす國を治むるに精神と力と體との三用あるを知
らざる可らず賢と愚とは精神に屬し強と弱とは力に屬し大と小とは
體に屬す今夫れ智も用ひされは暗し寧ろ愚に至らんより力も用ひさ
れば弱し或は強者の奴隸なり體に在りて自ら肥す能はされば瘠す小
國大國の勢なり此等の立言或は怪まれんも余は確乎として是を信用
せり優勝劣敗は此理會中の事柄なり是は過去に徴するも蓋し然らさ
るなし是は現今未來に援據するも奚ぞ獨り不可なる者あらんや
余一日も汝に長たるを以て此に數言を陳すと云爾若し夫れ勇往敢爲
の志節を勵して光明磊落の事業を施爲する是れ諸君の才のあす所余

の贅言を待たざるなり

●生絲繭共進會褒賞授與式祝詞

松方正義

生絲繭は固有の名産輸出の雄物なるを以て四方の之れに従ふ者亦能く國家の利益を謀り奮て本會に應ずる者既に千百餘名其陳列する所の數千三百廿六品の多きに及べり而して近來此業の著るしく進歩せしは殆んど面を革たむと謂ふ可きなり其間許多の災害なきに非ずと雖も能く今日の地位に至る者は即ち堅忍耐久の彩華にありすして何ぞや諸君の營業に奮勵なる斯の如し審査の責豈に慎まざるへけんや是を以て之を審査するに從來の鑒定法と洋式の試験器とを用ひ之に利益の得失と功勞の成績とを以てす其生絲は荷造東方光澤評價或は強力節の多少再練の難易器械所の大小と練目人員製造の嵩に溯り其繭は光澤形狀緊緩齊否解縲の難易絲の長短節の有無原紙の枚數と收

繭の多寡等悉く參互酌量せざるはなし今や廣く各地に選ひたる我老練なる審査委員は日夜電勉克く其職を竭して以て優劣を鑑別するの功を了し曾て纖毫の微も遺す所なし是を以て正義等篤く信す觀察の緻密にして且つ周到なるを切に望む該業に従事する者將來愈其業を勉め益其聲價を發揚するあらんとを

○諸體文

●新年會社員諸子に告ぐ

成島柳北

噫嘻我が朝野新聞社の諸子よ漁史幸に諸子と共に又芽出たき新年を迎へたり例に隨ひ一觴を捧げて以て相慶せん夫れ明治十三年の今日を以て遙に漁史が少年の歳首に比すれば其の轉遷變革實に驚く可き者あり試に其の一二を擧げんに往時の大名や家老や用人や中小姓や變じて華族となり士族となり平民となり家令家扶となる而して新年の新年たるや一也直垂や大紋や素袍や麻以下や變じて大禮服となり

○生絲繭共進會褒賞授與式祝詞○諸體文○新年會社員諸子に告ぐ

小禮服となり、フロックコートとなる而して其の新年たるや一也、鎗持や箱持や駕籠舁や變して馬車の御者となり、人力車夫となる而して其の新年たるや一也、屠蘇や喰積や門松や亦半ばは變して葡萄酒となり、牛肉炙とあり、西洋飾となる而して其の新年たるや一也、古の貴公子は春首よ於て侍姫琴瑟を後堂に彈じ、福引や歌牌や其の遊び優にして雅なり、今の貴公子は否、聲妓三絃を酒樓に鼓し、檮蒲や花牌や其遊び捷にして奇なり、然れども其の新年たるや何ぞ古に異ならん、漁史窃に謂ふ、今より後十年廿年を経ば、世態人情復た如何様な變遷有らん、測るべからず、而して新年は甚だ芽出たきものにして、開闢の始めより明治十三年の今に至り、又幾億萬年を経るも決して變換するに無からん、夫れ時を逐ふて變するは人と物となり、新年は敢て變せず、我社は業を明治の第六年に創む、而して其の景况、一年一年に異なり、其の初めに於ては僅々十餘名の社員相會し、一瓶の屠蘇以て新年を迎へたるも、今は一百

余名の社員團樂一大宴會を開き、以て新年を賀するに至れり、然りと雖も、今の新年豈往きの新年に異なりと謂はんや、之を推て考ふれば、我社今より更に我屬の隆昌を極め、社員幾十百名を増加するも、新年は亦依然として同じきを知る、噫嘻、我が社員諸子よ、新年の年々同じきに關はらず、益す社運の盛大に進み、一年毎に氣象の同じからざらんことを期して、毫も怠ると勿れ、至囑々々

● 日就社長子安君新居新年會の頌詞

成島柳北

明治十四年一月十二日子安先生濱松の新居に新年の宴會を開き、社員を招て之を饗す、漁史亦與かる、蓋し恒例に隨ふ也、酒闌なる時、漁史將に起て祝詞を呈せんとす、先生曰く、我が家は新築にして、本日の會は新歲を賀する也、頌詞も亦陳腐の語を禁ず、請ふ祝するに、斬新の辭を以てせよ、漁史敢て逡巡せず、進て問て曰く、先生常に謠曲を好み、且つ善く謳ふ

今日の會祝するに謠曲を以てする可ならんか先生曰く可なり漁史乃
 ち祝の曰く美なる哉此の新館庭上の松風長く歡聲を發す快なる哉此
 の新年窓前の梅枝恰も喜色を添へたり主人は此に鶴龜の齡を保ち更
 に社運は望月の缺くる無きを期す是に於てか例を照して社員を會し
 以て交誼を玉井の深きに比せんとす社員其勇熊坂の如く其智張良の
 如く能く筆を舞はして自由なる千手觀音の如き者西南より至る有り
 東北より會する有り漁史亦た遠き隅田川の邊りより來たつて席末に
 加はり酒は溢れて養老の泉よりも多く肴は積て龍田の山よりも高し
 主客の量は彼の狸々に百倍するも阿漕の浦の網ならねど引取る盃の
 度重なれば夕日さゝぬに夕顔は時ならぬ色に紅葉狩折しも天鼓聲高
 く舞ふ羽衣の袂より春を送るは何者ぞ禪妒たる容色は楊貴妃も三舍
 を避け小鹽の山の初霞新たにたちし小袖曾我袖を列ねて進みたる二
 人辭は淋しとて摘み集めたる花筐集めし花の數知れず座客は益々興

に入り汝うたふか我れ舞はんぞ鞍馬天狗も現はれぬ其鼻のみは高砂
 なれど足はよろめく弱法師今日の酒宴そ面白き抑も主客の斯く歡を
 盡す所以の者は豈浮舟の浮きたる心より邯鄲一夢の榮華を樂むなら
 んや平素勸懲に心を碎き安達原の惡魔を壓し女郎花の弱きを助け百
 萬の蒼生を諭して我が皇帝の風化を補ふ社員諸君が勉強刻苦を慰め
 ん爲めの宴會なるを知る漁史竊かに卜す先生の幸福は恙ず崩れず老
 松の茂きが如く社運は動かす替らず石橋の堅きが如くなりしを漁史
 久く先生と杜若の縁有るを以て諸君に先だつて以て拙辭を呈す若し
 其の無禮を咎むる有らば漁史は既に醉へり言ひしは難波の蘆刈けり
 と謝せんのみ

改稱節を祝する文

成島 柳 北

夫れ其論を金玉糖にし其筆を自在餅にする者天下能く幾人か有平な
 るや面は餛飩の皮計り厚く煎餅の旨味薄きは是れ記者の餅まへなり

○改稱節を祝する文

況や我輩は古人の糟ていらを紙り他人の説を借ん糖以て其口を糊す
るをや然るに思はざる牡丹餅の棚より落つる幸福有つて社運の昇る
朝日餅の如く長く社名を幾世餅に傳へんとす於是乎時雨月二十四日
を下し第二週年改稱節の賀筵を開き各々全社の大福を祝す是日や天
字静かにして村雨灑ぎ松風簷に響き落雁雲に嘶く我輩下戸と雖も亦
甘酒を酌み汁粉を啜り以て看官の魚腹は越の雪よりも深きを謝し社
主の鼻は棹餿頭よりも長きを喜ぶ嗚呼我輩砒毒賤しき身ながらも筆
硯の光輝を發して世間烏羽玉の闇を照さんとを望み宜しく眼を和漢
の三盆あらぬ萬卷に注す可し且つ議論を練羊羹の能く練り牛皮の柔
かなるを主とし胃に毒なる黒飴を妨害すると無く我社をして金鑄の
缺くる無からしむるのみならず四海は圓子の圓く治まり鹿兒餅の好
物なる切山椒の切たり張たりする荒粉の騷動を止めて天下益々太平
糖ならんとを望む拙文敢て飴細工の長きを欲せず唯だ一口香の祝辭

をもち柚べしと局長成島柳北頓首再拜して白す

● 戯場の事に寄せて談洲樓主人を

ことほく辭

芍藥亭長根

烏の不啼日はあれと戯場を不慕事なし故に亭を烏亭といひ飯を不炊
日はあれと三升を不慕事なし故に樓を談洲といふ白石嘶の七ツ目棧
敷を啼す太平樂の二巻切落を驚かす舌の回仕掛に落語の道具立を列
ぬる事多くして口の拍子幕に狂歌の太刀打をする者鮮し名は太鼓棧
の高く響き響は鯉棧敷の遠く聞ゆ老て益々壯なり藝を慶子になすら
ふへく隠ていよ、顯る徳を白猿にたぐふべし耳順の年となりて鼻を
愛する情ふかく大小に市川の浪を揚ぐ眼かすむ春となりて舌を弄ぶ
術すゝみ豎板に水仕合の水を流す今年享和癸亥二立目の正月のはじ
め下り役者の京屋の樓に賀の麩をひらきて最負連中を會ふ門に大入
の札を掲ぐ人は張籠の山をなせり土間に女形の座をわかち舞臺に出

○ 戯場の事に寄せて談洲樓主人をことほく辭

語の席をまうく祝蓋の並大名客をむかへ煮肴の赤燗酒を侑む器なしの狂言と聞てももに百年の齡をのへ心ある友垣にあふて同く千秋樂をうたふ千代ふべき君が齡のめあてには見つけ柱の松をなさばや

○拾遺

●雜誌「北海道」發刊祝詞

村田保

頃日村尾元長氏雜誌を發刊し北海道拓地殖民の事業の進歩を圖らんとす蓋し其方法たる一は以て全道の事情を内地人士に報道し爲政の参考を資し移住計畫の便を與へ一は以て北海道の利源を有力者に説明して資本の流入を媒介し北海道に對する意見を記して北海道民に報告し彼此の間に事情を疏通して以て拓殖の事業に裨補せんとす誠に時の急に應ずるものと謂ふべし
近時殖民の事煩る世の注目する所となり海外諸國に向つて之が探檢を爲すもの少なからず此舉固より善し然れども翻て北海道の狀態を

一顧すれば猶ほ大に拓殖を勉め利源の開闢すべきもの多し安んぞ近きを捨て、遠きにのみ力を致すべきの理あらんや況や其土たる山に鐵物を藏め地は概ね耕耘に適し森林の良材に富むをや若し夫れ水産の利に至ては全道の沿岸處として千金の漁場に非らざるなく鱒收獲の多き遠く北歐の主産國に超へ鱒の如きは世界三大漁場の一と稱せらる其他沿岸には昆布を生じ河川には鮭鱒を産す況や貴重なる海獸の生息するをや而して其尙ほ墮没して顯はれざるの利に至ては殆ど屈指に違わらざるべし之が拓殖の事業一日も忽諸に付すべからざるなり而して其遅々たる今日の如くなる所以のものは蓋し其事情の世間に明かならざるに由るべし余昨年親しく此土を歴巡し其山川風土を觀て益々此感を深ふせり今や北海道雜誌出其狀況を世に明かならしむるに於て大なる助あるを信ず茲に其發刊に方り聊か所見を記して以て寄す

●北海道の發刊を祝す

ドクトル、ラフ、ラヒロフ、ヒイ 佐藤 昌介

北海道の拓殖事業は方今の一大急務なるは既に輿論の是認する所たり府縣に於ける過剩の人口を北海道に移住せしめ遊資を注入して大に實業を發達し其富源を開發するときは帝國の富實を増加する實に圖るべからざるものあり北海道の沃野千里農耕牧畜に適するの地耨犁未だ土壤に觸れず鬱蒼たる山林斧斤未だ之に入らずして太古の觀を具へ空しく富源を放棄するの狀なしとせず豈惜むべきにあらざるや殊に其水産の如きは沿岸六百里の長き魚族の豊富なる天下無比なりとす大に其漁撈の方法を改良し或は遠洋漁業を進め或は水産製造を起すときは其收額今日に倍蓰する亦疑を入れざる所なり其他機械工業の發達採礦の進歩は亦北海道の富實をして益々強大ならしむるを得ん今や幸ふ社會の輿論は拓殖の急務なるを認識して大に其發達

進歩を促すものゝ如し況や又鐵道の延長航路の擴張通信の便利は益々北海道拓殖事業の進歩を助成するものあるに於てをや此時に當り北海道の實況を府縣人士に迅速に切實に報道し或は開墾の方法を指示し或は地理氣候の情況を報じ或は金融の繁閑或は農業水産の發達其他北海道の實業に關する一切の事情を報道し以て拓殖の指針となすは拓殖事業を進捗せしむるに於て特に必要なりとす畏友村尾元長君茲に見る所ありて北海道を發刊し以て北海道拓殖事業の指針たるを期す余大に其時事に適切なるを認め聊か拓殖事業の急務なるを一言し以て其發刊を祝すと云爾

●千葉公立病院開業祝詞 柴原 和

質美ならざるに非ず才優ならざるに非ず然して其志す所の道貫かず執る所の事果さず創始發明の力に乏しきものは我が邦人亘古の通患なる之を要するに精神の旺盛せざると身肢の強からざるに淵源せざ

○北海道の發刊を祝す○千葉公立病院開業祝詞

るなし朝廷此に見る所あり明治中興の歳首として醫學所暨ひ病院を
 創置し摸象の陋見を排し實驗の眞理を講し哲人を海外より徴して之
 を禮遇し醫士を國內に扱て之を鎔冶し沈痾を既に斃るゝに起し疴
 を未だ病まざるに拯ひ一世をして矜式する所ありしむ爾來醫學の基
 衛生の道日に獎み月に隆りなり是蓋し元々を煦育保全し康寧活潑以
 て魁奇の材を展べ雄偉の圖を立てしめ萬國對峙の聖猷を開張せんと
 せらるゝなり醫學の國歩に關する實に重く且つ大なりとす我縣の新
 たに置かるゝや醫學興らす病院立たず健全保護の法未だ嘗てあらざ
 るなり和員に地方の長官に備はり其部民の生を聊んずる能はず且つ
 朝旨の注ぐところに違ふを慨し之を有志者に詢るに有志者允諾す之
 を僚屬に令するに僚屬奉承す資を捐て精を勵まし明治七年を以て千
 葉病院始めて立ち院長を擧げ醫員を選み専ら部民の疾苦を問はしむ
 尙僕歩を踵ぎ跛蹇門に填つ癘を起し骨に肉する者千百にして足らず

是に於てか人皆生の貴ぶべき病の忽かせにすべからざるを知り病院
 の規模尙ほ小にして醫學の未だ起らざるを憾むに至る和衆望の嚮ふ
 ところに因り茲に病院を新築し屬するに醫學教場を以てす之れか教
 頭を聘し之か生徒を募り鼻きより高きに遷り邇きより遠きに及はし
 衛生濟病の方をして闔管に覃敷せしめんとす今や土木功を倭へ教頭
 始て至り其開院の式を行ふに至り和僚屬を率お此に臨み教頭院長及
 び有志者と此盛事を祝す抑も此院の營構輪奐離奇の觀るべきなしと
 雖も亦清楚の態を存し地位交壇開豁の愛すべきなしと雖も尙ほ幽邃
 の趣を備へたり庭松偃蹇能く秋霜の烈たるに傲り門柳扶疎將に春雨
 の澤に浴せんとす此院に在るもの各々其職を曠くせず誘掖率勵生徒
 をして操行端正學術進修數年の後造詣する處ありしめ大區より小區
 に小區より村町に及はし星羅棋布して支院分院を開き以て人に夭折
 の福なく家に黃耆の慶あらしめば彼の精神を旺し身肢を強くし美質

優才皆能く道貫き事果し創始發明の累績を奏せんと始めて方に庶幾
すべきなり是和か朝旨を奉じて部民の健全を保護するの素願にして
今日有志者と共に教頭院長に懇囑する所以なり

● 交詢社創立會祝詞

西

周

維明治十三年一月二十五日は如何ある吉祥日子なりや譎劣余が如き
者も一朝にして千七百余人の交友を得たり此の如き許多の交友を都
鄙に得るは諮詢の道に於て廣く且つ盛ん也と謂ふ可し然り而して諮
詢の道は廣く且つ盛んなりと雖も其諮詢の目的は何物なりや是社名
二字の義に於ては悉くす能はざる所にして即ち社則中に揭示する所
世務の二字に在り然り而して世務の二字たる其包含する所廣く且つ
大にして際限有ると無し凡る天下人世の事何事か世務に非ざらん然
らば則ち諮詢の目的一物をも包含せざるなくして諮詢の道廣く且つ盛
なるや將た何を以て之に加へん余請ふ此廣く且つ盛にして一物をも

包含せざると莫き者に就て暫らく唯一言を加へて此祝詞を畢らんと
欲す是即ち交詢の字義にして正に題目に合する所なり交の字義に曰
く古人交道を論じ之れが規矩を示して曰く己れに如かざる者を友と
すると勿れ此言遽かに觀れば驚くへく怪む可きか如しと雖も深く其
意を究むれば必ず驚き且つ慚む可きの言に非るなり何となれば句中
「如く」といふ用言に何といふ目的を示さざるを以て此雙關を致せり故
に此言たるや徳の己れに如かざる者と云ふに非ず又才の己に如かさ
る者と云ふに非ず況して富の己に如かざる者爵位の己に如かざる者
腕力の己に如かざる者頑愚の己に如かざる者等に至りては想像にた
も能はざる所なるをや然ば則ち何物の己に如かざる者にして友と爲
す可からずと謂はんや余は則ち對へて曰はん智識の己れに如かざる
者は友と爲ると勿れと謂へる耳然れども此言亦遽かに觀れば頗る疑
ふ可く異しむ可きに似たりと雖も深く其意を究むれば亦疑ふ可く異

しむ可きの事に非ざるなり何となれば天下曾て十全なる智識有る可
らざればなり即ち此社の規則中に云へるか如く漢書を讀みて洋書を
知らざる者は博學者に聞くべし洋學に達して國家に不案内なる者は
國家者に質問す可し啻に文學のみならず商人は農業の有様を百姓に
聞き農家は商買の事を市人に問ひ學者士族か農工商に營業の實際を
質し農工商は士族に思想の方向を尋ぬる等にて總て一人にて何も斯
も知りて萬全無缺と云ふ人は聖人と雖も曾て無き事にして孔子も老
圃に如かすと云はれたるが如く天下の知識各々其長所を取らば已
れに如かざる者は無く皆以て友として已が知識を補助するに足るな
り然らば則ち天下の人かの兒童蒙昧の徒に非るよりは孰れか友とす
るに足らざる者あらずや畢竟此言の大意已が爲めに成らざる人を友
とすると勿れと云ふ意にして公道を論じたるは盡せりと謂ふ可し故
に知識の補助を求むるの切なるに至りては亦蕪蕪に謀ると云ふ言わ

り論の字義に曰く古人知識を論じ控問諮詢を以て知識の第一義務と
爲す曰く舜は其れ大知か舜問ふを好みて邇言を察す曰く已れを捨て
人に行ふ曰く耕稼陶漁より以て帝たるに至るまで人に取て以て
善を爲すに非る者莫し曰く孔文子敏にして學を好み下問を恥ぢず等
凡る諮詢即ち相談を以て知識を取るの門戸とする者は聖經賢傳比々
其例有りて枚擧に遑あらざるなり是交詢の字義にして古人の糟粕今
人の皆知る所の舊套なり然るに舊套なりと雖も之を事實に徴して眞
に然るとあらば別に新奇の説を求めずして可なりと信ず而して又之
に重ねるに猶ほ一ツの舊套を以てして曰く人の爲めに謀りて忠朋友
と交はり言て信ありと是交詢の上にて尤も以て要道とする所にし
て交はる上に於て虚言を言はす諮る上に於て眞心を以てせば即ち此
交詢の社永久榮昌にして後日今日を以て創立の日として再び祝する
の時あらん若夫然らざる事あらば必ず言の信ならざると謀るとの忠

あらざるに由らん是亦舊套驚くべく異しむべきの言に非すと雖も聊か鄙衷を呈して此社の昌榮を祝すと云ふ

●呈耶那亞公祝詞

川村永之助

謹みて伊國皇族耶那亞公殿下に呈す殿下航路恙なく着艦直ちに駕を東京に駐められた敬祝敬祝余輩賤民敢て一言を呈し以て殿下親臨の辱きを謝す抑も國の貧富強弱は職として貿易の盛衰物産の興廢亦職として交際の親疏に因らざるは無し蓋し三者并び行はれて相戻らざれば則ち國の富強期すべきなり我國外交已來僅かに二十年而して今や物産の繁殖貿易の盛隆學藝の進歩之を二十年前に比すれば其面目を改むる表裏音あらず僅々二十年の歲月にして能く今日の開進を致す者は蓋し外國交際の好結果に非ずして何ぞや然らば則ち人世一日も交際なくして可ならんや夫れ我國養蠶の業たる國産第一の地位を占むる世人偏く知る所なり此を以て貴國と貿易交際の關係亦自から大

且つ密ならざる能はざるは殿下の親く知る所なり已に大且つ密の關係兩國の間に在りて存す苟くも養蠶に従事する者豈に救々汲々として品質の佳良と製造の完全とに注意し以て彼我の其益を謀り將來貿易の盛昌を勉めざるべしや今や殿下の東道に會し余輩蠶業の實況を開陳するは此を捨てし將た何れの時を期せんや因て幸に齎す所の蠶種紙繭等數品を獻呈し併せて意見書を一覽に供す殿下余輩か傲表を諒せらるれば余輩平生の努力空しからず幸甚の至りに堪へず敢て燕辭を陳し以て祝詞に代ふ

●京都織工場開業式祝辭

榎村正直

人生關くべからざるものは衣食住にして其最も人工を要するものは衣服なり政をなすもの注意せざるべからず今を距る專一千五百九十五年前人皇十五代應神天皇十四年百濟國織衣女を貢じ二十一代雄略天皇六年諸國に詔し桑を植へ后妃に勅し蠶事を勤めしむ同十四年

人漢織吳織を貢し本邦織工の業大に開く五十代桓武天皇延暦十八年
 印度人木綿實を殖し來り四國紀州に之を植るといへども中間其種を
 失ひしに百七代後陽成院天皇文錄年中支那國より再び之を傳へ衣服
 の料其用大なりとす近年外國交易の道開け彼れか輸入する絹綿毛布
 其製精にして其用多く殆んど内地の布帛を壓せんとするの兆あり抑
 も京師の地たるや衣服の料を製出する古來名譽の所にして往昔漢織
 吳織の業を傳へしも正しく西陣に在りて今に至るまで海内舉て京師
 の製方を仰ぎ倣ふ夫れ斯の如くにして豈空しく内地製品の輸入物に
 壓せらるゝを坐視するの理あらんや若かず勇進して彼が長を取り我
 が短を補ひ出藍の青未然の萎縮を救はんには去る明治五年二三の織
 工を勸誘し遙かに佛蘭斯國に航せしめ其織法を學び此にこれを傳へ
 しめ繼て昨明治十年八人の學生を發遣し尙其學を研究せしめ庶幾は
 織工の開進に功驗し古來の名譽を擴張し内外の製品を盛大ならしめ

んを嗚呼此場を開く原因を悠久に延き功驗を遠大に望む豈一時一
 場の經濟の爲めならんや此場を看る者此舉を聞く者能く此意を領さ
 ば亦以て國家經濟の裨益をなすあらん

●小笠原午橋六十壽序

南 摩 羽 峯

小笠原午橋頃日朽木縣に寓し文學に従事し東を寄せて日將に六十の
 壽筵を開かんどす然れども尋常の壽詞は予肯て請はす戊辰の役予主
 命を奉して米澤に抵る歸れば則邸宅既に兵燹に罹り器物蕩盡し平生
 用る所の鐵鑪鐵に存す乃之を拾收し今猶焉を資用す友人爲に歌詩を
 賦す予因て感する所あり將に其歌詩若くは文を梓して以て壽詞に代
 へんとす請ふ子一篇を惠まれよと嗚呼余午橋と竹馬の友と爲す嘗て
 窓を日新館に同くし又牀を昌平巖に連ね經史を論し詩文を評し切悃
 の情陳雷も畜ならざるなり後又共に國難に遭ひ東西に奔走して寧所
 に違わらず今にして而して當時事を同くする者を回顧するに或は難



